

ヘルスケア 2017/05/06

♡ Like 6

美容的メリットでも話題。おなかにキズがつかない「単孔式腹腔鏡下手術」

文字サイズ 

記事の保存を取り消す

女性が手術を受けるとき、「できれば、体にキズをつけたくない」と思うのは当然です。特におなかの皮膚は柔らかく、ちょっとしたキズ跡も目立って気になります。そこで、胆石や虫垂炎（いわゆる盲腸）などの手術で始まった、キズの見えない手術法をご紹介します。

なぜ、手術跡が見えないのか。「単孔式腹腔鏡下手術」に詳しい渡邊学先生（東邦大学医療センター大橋病院外科准教授）に、お話を伺いました。

| 体に1か所だけ穴をあけるため、痛みなどの負担も少ない

この手術は、「腹腔鏡下手術」という方法の一つです。

Page Top

「通常の腹腔鏡下手術は、例えば胆石の手術の場合、おなかの4か所に小さな切開創（キズ）をあけ、そこからカメラのついた管や手術器械を挿入して行う手術です。医師は、カメラで写したお腹の中の画像をテレビモニターで見ながら、患部の摘出を行います」

と、渡邊先生はいいます。これまでの開腹手術に比べれば、腹腔鏡下手術でのキズはごく小さく、術後の痛みも少ない「低侵襲」（体に負担の少ない）な治療だといえます。

この方法がさらに進化したものが、「単孔式」の腹腔鏡下手術なのです。

「単孔式」では、文字通り、おなかに1か所だけ穴を開けてカメラや手術器械を挿入します。切る場所が1か所だけなので、キズの痛みや出血もほとんどなく、術後の癒着などの副作用も少なくなります。

ポイントはおへそにくぼみから手術すること

特に、渡邊先生らが行っているのが、「おへそにくぼみ」をうまく使った「単孔式」の手術です。

「その人のおへその形に合わせて、おへそからはみ出さないようにT字型などに切開して手術を行い、おへその形に合わせて縫合します。こうすると、キズはおへそのなかに隠れてしまうため、ほとんど分からなくなります。そのため、「キズの見えない手術」と言われています。」（渡邊先生）

おへそのキズは溶ける糸で縫っており、抜糸の必要はありません。キズが小さいので入院期間も短くなります。渡邊先生の病院では、金曜日に手術を行って日曜日に退院するという週末オペを行っているとのこと。仕事が休みにくい人や、平日には家を空けにくい家庭の主婦にも、うれしいシステムですね。

へそピアスがあっても…

この手術法が、どれだけ皮膚にキズを残さないかということについて、さらに渡邊先生に伺いました。たとえば、「ビキニを着たいので」ということで、単孔式の腹腔鏡下手術を希望される人はよくいるとのこと。

また、

「胆石の手術を『単孔式』でしてほしいが、おへそにピアスがあるので大丈夫でしょうか」

という問い合わせもあったそうです。この方の場合も、切開の方法を工夫して、ピアスをつけたままの手術に見事に成功したそうです。

「すべての美容的な要望に応えられるわけではありません。手術の正確さと安全性を第一にしつつ、できるだけ患者さんのご希望に沿う手術を行います。しかし、症状によってはできない場合もあります。」（渡邊先生）

「単孔式」の腹腔鏡下手術は、保険が使える治療法

胆石とは、胆のうの中にできる石です。おなかの中で、肉類など脂肪分の多い食べ物の消化を助けている胆汁の成分やコレステロールが固まって、小石や砂のようになったものが胆石です。

日本人では、成人の10人に1人が胆石を持っていると言われます。しかも、女性のほうが男性より、胆石を持っている人は1.4倍も多いのです。

なお、尿管結石や膀胱結石と混同し、「おなかにできるといってたくさん飲めば流れる」と考える人もいるかもしれま

せん。しかし、

「胆のうは尿や食べ物の通り道ではないので、胆石は水を飲んででも流れることはありません」（渡邊先生）とのことです。

胆石の手術をはじめとして、「単孔式」の腹腔鏡下手術は、健康保険が使える手術になっています。美容メリットがあるからといって、よけいな出費は心配いりません。

旅行や転勤などをきっかけに、胆石の手術を受ける人も多い

「胆石があるとわかって、すぐに手術が必要なわけではありません。定期的にエコー検査などを受け、脂っこいものをあまり食べないことなどに気をつけながら、様子を見ていくこともできます。また、胆石では、飲み薬で石を溶かす方法や、衝撃波をあてて石を砕く方法もあります。しかし、治療できる石が限られていたり、治療に時間がかかるうえに、ぶり返してしまうこともあります」（渡邊先生）

しかし、心配なのは、胆石のある状態で様子を見ているうちに、胆石が胆のうの出口などに詰まって炎症が起き、激しい痛みが起こるといことです。これが、急性胆のう炎です。

「胆石があると、急性胆のう炎はいつ起こるか分かりません。また、わずかですが、胆石がある人では、胆のうがんが隠れている場合もあります。そこで、旅行の多い人や海外転勤が決まったときなどに、無症状でも摘出手術をする人も近年は増えています」（渡邊先生）

このほか、「単孔式」の腹腔鏡下手術は、胆のう、虫垂の手術だけでなく、最近では胃や大腸の手術などにも行われるようになってきています。

「「単孔式」の腹腔鏡下手術は、美容的メリットは大きいですが、従来の腹腔鏡手術に比べて、1か所の穴だけで行う手術ですので手術は難しくなります。そのため、術者は豊富な経験と高い技術が必要となります。詳しくは、この手術を行っている医療機関にご相談ください」（渡邊先生）



渡邊学 先生

1966年生まれ。東邦大学平成3年卒業。東邦大学医療センター大橋病院外科准教授。胆のう専門外来担当（渡邊先生の外来は毎週木曜日午後）。専門領域は肝臓・胆道・膵臓外科、内視鏡外科。傷の見えない単孔式腹腔鏡下手術のスペシャリスト。日本消化器外科学会専門医・指導医。日本肝胆膵外科学会高度技能指導医、日本内視鏡外科学会技術認定医など、学会資格・役職多数。

東邦大学医療センター大橋病院

食道・胃・大腸外科、呼吸器・頸部外科、肝胆膵外科（肝臓・胆道・膵臓専門外来）、乳腺外科、肛門外科、ヘルニア外来などの専門外来を持ち、悪性腫瘍（がん）から良性の腫瘍、ポリープ、虫垂炎など炎症性の病気まで幅広くカバーしている。また、より侵襲の少ない治療を第一に内視鏡手術や腹腔鏡下手術、場合により両者を組み合わせ、おなかを切らない手術治療を行っている。渡邊先生の在籍する肝胆膵外科では、胆石症などの良性疾患に対する腹腔鏡手術の症例数は年間200例を超えている。最新の術式である単孔式腹腔鏡下手術もいち早く導入しており、技術向上のための技術審査を積極的に行っている。術後の感染症対策も良好で、日本でも最もMRSA（院内感染を起こしやすく抗菌薬が効きにくい耐性菌）が少ない病院とされる。